

かながわの考古学

2009.3

財団法人 かながわ考古学財団

目 次

神奈川県における旧石器時代の遺物分布(その2) -L1S層~L1H層(2)- 旧石器時代研究プロジェクトチーム	1
神奈川県における縄文時代文化の変遷Ⅶ -後期初頭期 称名寺式土器文化期の様相 その4 文化的様相(2)- 縄文時代研究プロジェクトチーム	17
神奈川県内出土の弥生時代金属器(1) -鉄器集成- 弥生時代研究プロジェクトチーム	31
考古学の先駆者 赤星直忠博士の軌跡(6) -通称「赤星ノート」の古墳時代資料の紹介- 古墳時代研究プロジェクトチーム	43
神奈川県における集落遺跡出土の瓦の様相(2) 奈良・平安時代研究プロジェクトチーム	59
神奈川の中世城館(1) 中世研究プロジェクトチーム	81
近世民家の集成(6) 近世研究プロジェクトチーム	97

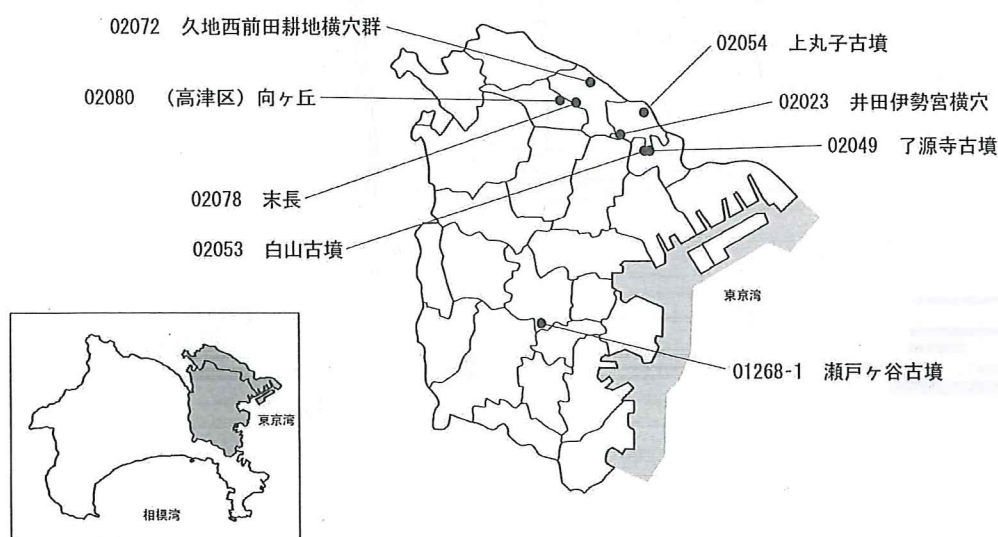
考古学の先駆者 赤星直忠博士の軌跡(6)

一通称「赤星ノート」の古墳時代資料の紹介

古墳時代研究プロジェクトチーム

例 言

- ・通称「赤星ノート」の神奈川県埋蔵文化財センター保管分の古墳時代に関する項目を抜粋し、報告・掲載していくものである。
- ・研究紀要第14号には横浜市域にあたる01268-1番、川崎市域にあたる02023・02049・02053・02054・02056・02072・02078・02080番を掲載している。
- ・番号は埋蔵文化財センター年報14～18に記載されている番号に対応している。
- ・執筆分担は01268-1番：植山 英史、02023番：柏木 善治、02049・02053番：林 雅恵、02054番：新山 保和、02072番：小西 絵美、02078・02080番：吉田 映子が行った。
- ・各記述は「1. 赤星ノートの内容」「2. 記載資料の整理」の2つに大きく分け、1. の細目は[調査(踏査)年月][資料保管場所][記載内容概略]とし、2. は[(遺跡及び)遺物(遺構)概要][掲載図書][掲載図書概略][小結]などとし、資料に応じ該当部分を記載した。
- ・挿図や図版は基本的に作図者のタッチを重視し、赤星氏の図、もしくは実測者の図をそのまま掲載し、写真に関しても同様である。
- ・「赤星ノート」は遺構図では略測図に寸法の数字が記載されるものが多く、遺物図は基本的に原寸に近い図ではあるが、なかにはそれから外れるものも存在するため、縮尺は任意掲載のものが多い。



第1図 対象遺跡及び遺物位置図

年報番号横浜 01268-1 瀬戸ヶ谷古墳（3） 横浜市保土ヶ谷区瀬戸ヶ谷

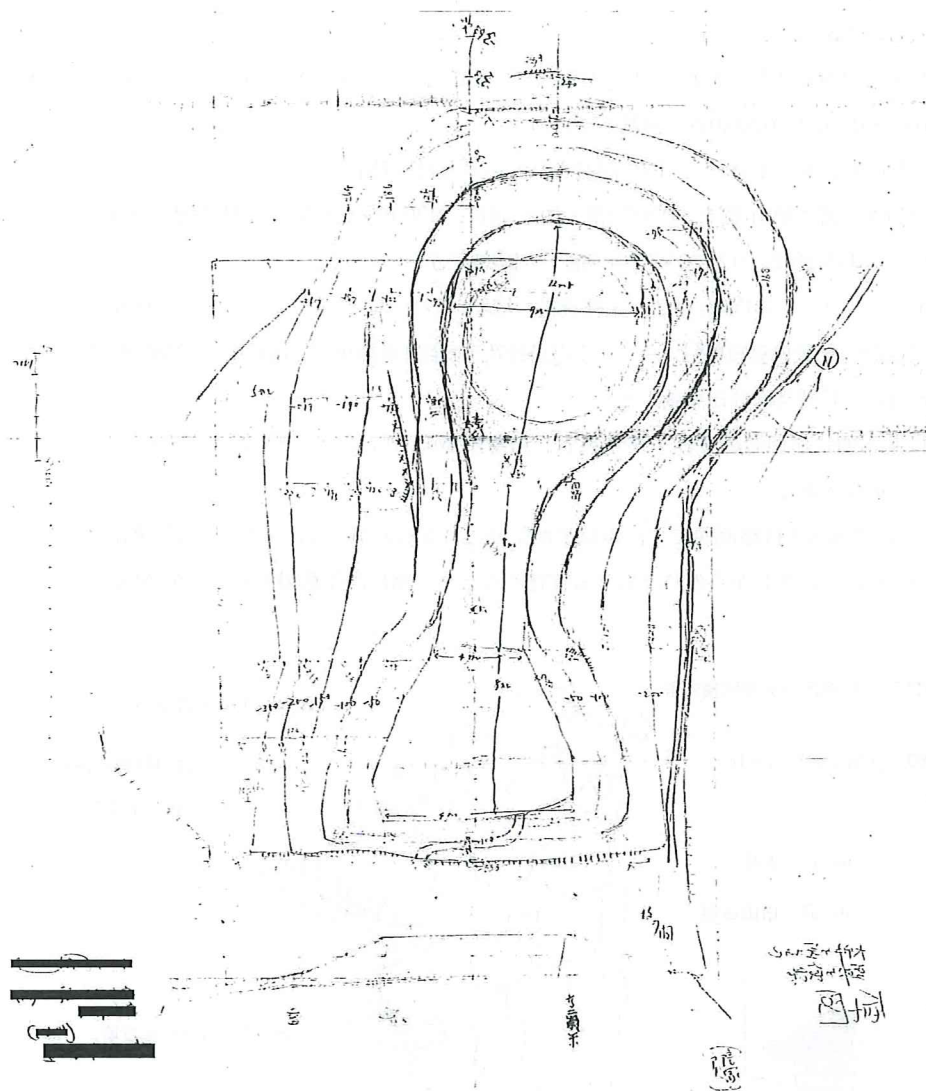
1. 赤星ノートの内容

[調査(踏査)年月] 1943・1950年

[資料保管場所] 東京国立博物館

[瀬戸ヶ谷古墳と赤星ノート 3]

前回、01268-1を1～6に細分して概要を記した。今回は、このうち1と2の一部について紹介する。



第2図 瀬戸ヶ谷古墳昭和18年測量図（大要図）（原図の1/3）

資料 01268-1・1 (國學院大學同友会封筒)

①昭和18年測量図(大要図) 1枚(B2相当方眼紙)(第2図)

封筒内の測量図は、方眼紙を7枚貼り合わせて作成している。左上に赤ボールペンで「原図 測具を使わず大要を測ったもの」と書かれている。右下には、鉛筆書きを青インク(万年筆か?)でなぞった、「昭和十八年七月四日測(赤星)」(赤星は青インク字のみ)の書き込みがあり、横に黒インク(万年筆)で「保土ヶ谷区保土ヶ谷町瀬戸ヶ谷五六 保土ヶ谷古墳第一号」(第一号と古墳に入替校正記号)とある。

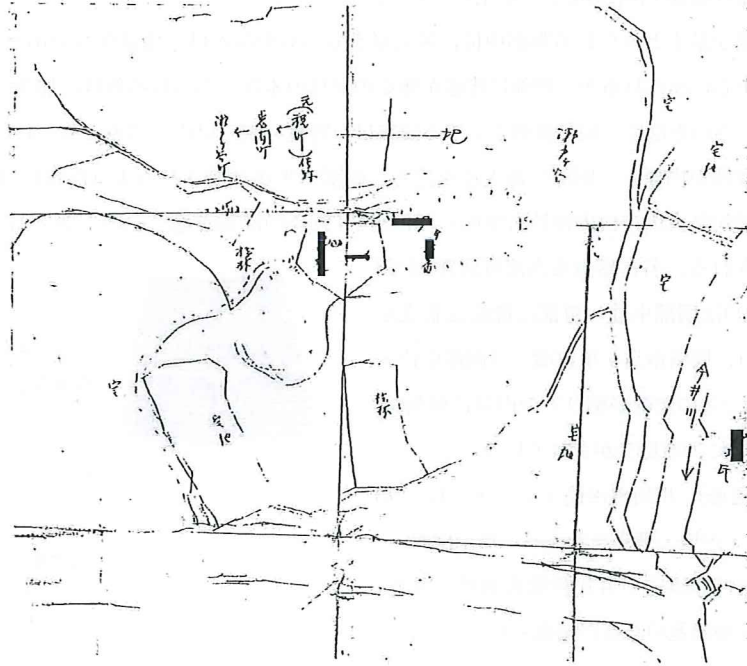
測量図(大要図)は鉛筆で記され、最大8本の等高線で描かれる。前方部側面の等高線上に、50単位で-50~-250の数値が書かれている。これとは別に、主軸に直交・平行する形でドットが落とされ、マイナス数が並んで書かれている。数字幅は、一ケタ台が0か5を基本とするが、距離間に規則性はない。主軸に直交・平行する任意の計測点のドットデータを元に、50cm間隔のコンターラインを引いたものと推測される。また、墳頂部には黒万年筆で距離が書かれている(後円部横幅9m、主軸長12m、前方部端幅9m、前方部後円側端幅4m、主軸長8m、くびれ部主軸長8m)。紙右端から前方部東端に向けて「→」が描かれ、紙右端に「(陪塚アリ)」の記述があり、その下方には「畑」と記されている。下方には手書きのスケールがあり5mが4.5cmである。先の墳頂部に記載された計測値も、このスケールに基づいた数値となっている。「測具を使わず大要を測ったもの」とあるが、精度の高い図であることが見て取れる。

資料01268-1・2(沙羅書房封筒)

①古墳位置概略図1枚(第3図)

薄紙に、瀬戸ヶ谷古墳周辺の様相が鉛筆で書かれている。古墳の位置は明記されていないが、中央に古墳の地番である「■番」の書き込みがある。「■番」は今井川に向かって北側に突き出た尾根先端部に描かれている。南及び西側には「宅地」と書かれており、すでに周辺の開発が進んでいた様相がうかがわれる。方位の右に「元(祝町) 俗称→岩間町→瀬戸ヶ谷町」と書き込まれている。昭和15年に岩間下町の一部分が、保土ヶ谷区瀬戸ヶ谷町になっており、町名の変遷を示したと思われる。「(祝町)」は岩井町のことであろうか。

今回紹介した資料は、いずれも昭和18年の発掘調査時に作成した資料で、その後資料整理段階で重ね書き等を行ったものと思われる。(植山)



第3図 瀬戸ヶ谷古墳位置概略図(原図の1/4)

年報番号 02023 川崎市井田伊勢宮横穴 川崎市中原区井田付近

1. 赤星ノートの内容

[資料保管場所]

川崎市産業文化会館蔵と書かれている(後に川崎市教育文化会館に名称変更)。

※川崎市産業文化会館には過去に収蔵庫があったが、川崎市市民ミュージアム設立後は一括して移管されている。

[記載内容概略]

図が入っていた封筒は、日本林学会のもので神奈川県立博物館図書室御中と記されるが、料金別納郵便のため年月等の情報はない。土器の描かれた図には、「須恵器 短頸壺」と記され、「口縁いびつ」、「櫛文方向不良」との注意書きがされる。他、サイズが書かれ「口径10.5 高さ10.0(9.8) 胴14.6cm」とメモもある。別紙には「川崎市 井田、伊勢宮横穴 不透明黄褐色曲玉1、須恵器短頸壺1 高10cm 口径10.5cm 胴径14.6cm」と記されるが、図は土器とその施文の拓本のみである。

2. 記載資料の整理

[遺構・遺物概要]

器形は広口となる小型の短頸壺で、胴部中位から肩部にかけて二段にくっきりと深めに沈線が廻り、それに画される位置及び上部に櫛歯による施文が廻る。底部はやや厚みを持ち、胴部は中位で最大径となる。口縁部は直立気味に立ち上がり、口唇部は内傾している。記録されているサイズをもとに図を計測する限りでは、ほぼ原寸大に描かれていると思われる。沈線や加飾の様相からは、6世紀末頃という印象も持てる。

広口となる小型の須恵器短頸壺は、県内でもそれほど出土例が豊富なわけではないが、平台古墳(真鶴町)・前谷原横穴墓群(大磯町)・宮山中里古墳群 I 区H5号墳(寒川町)・岡田西河内遺跡[大(応)神塚周辺古墳](寒川町)・折戸横穴群(藤沢市)・若尾山遺跡25号住居(藤沢市)・柿の木谷横穴群(鎌倉市)・大塚古墳群3号墳(横須賀市)・久本横穴墓群(川崎市)などで出土している。

古相を呈すとみられる胴部中位に最大径をもつものなどは、墳墓からの出土例が多い。6世紀末～7世紀代を中心にみられるが、胴部に沈線が廻るのが柿の木谷でみられる他は、加飾はされていない。口唇部が内傾するものもなく、同じ様相を呈する資料は、管見の限り県内ではみとめられない。

口唇部が内傾し、胴部に最大径を持ち、胴部上半が加飾されるような資料は、尾張～西遠江で散見される。愛知県犬山市白山神社古墳のものは肩部に2条の沈線が廻りその上部に羽状に櫛歯(刺突列点)による施文がされる。名古屋市東古渡町遺跡1次調査SD03は胴部中位～肩部に櫛描波状文が施され、岡崎市鳥ヶ根古墳では胴部中位～肩部に2条の沈線が廻りその内部に櫛歯(刺突列点)による施文がされている。

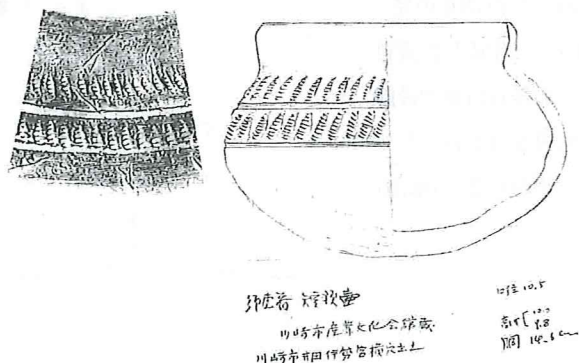
[掲載図書] 川崎市市民ミュージアム2006

「弥生・古墳・飛鳥を考える」展示図録

[掲載図書概略] 「井田伊勢宮前横穴墓群」

として短頸壺の写真が掲載されている。

(柏木)



第4図 須恵器 短頸壺(凡そ1/3; 拓本は一部分を掲載)

年報番号 02049 了源寺古墳出土 盤龍鏡 川崎市幸区北加瀬

1. 赤星ノートの内容

[資料保管場所] 東京国立博物館所蔵

[記載内容概略] 概略は前号で記述した通りである。ここでは、封筒の中に2枚入っていた白黒写真のうち残りの1枚について検討したい。封筒の裏面には「了源寺古墳六獣鏡外一（東博）」と書かれており、このうちの「外一」とある鏡である。写真の裏面には「了源寺古墳（東博）」と記されている。鏡は欠損部分も多く、大小9片程の破片が接合された状態である。しかし、接合方法に誤りがあったようで（東博 1986）、外形がやや歪んだ円形を呈している。表面の錆化も著しく、文様等是不鮮明である。内区の図像等も部分的に大きく欠損しているため判断しがたいものの、盤龍鏡と思われる。

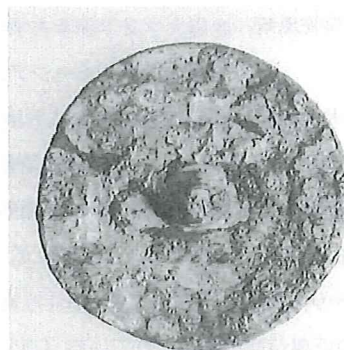


写真1 了源寺古墳出土盤龍鏡(約1/3)

『神奈川県史』には封筒の裏面にメモ書きされた内容と同様の「古鏡二面（六獣鏡一、他一）」と記述されている。本鏡に関しては「他一」とあるのみで鏡の種類については言及されておらず、また写真等の掲載もされていない。

2. 掲載資料の整理

[遺構・遺物概要]

鏡は面径10.5cm、縁厚0.3cmを測る（東博 1986）。錆化が著しいため本来の計測値とは多少異なると思われるが、以下、写真から起こした計測値を記す。内区径は6.5cm、外区幅は2.0cm。鈕径は2.4cm、櫛歯文帯幅は0.6cmを測る。不鮮明ながら構成は内区が鈕—主文様帯—櫛歯文帯となり、外区は複波文帯—鋸歯文帯—素縁と思われる。X線写真（東博 1986、東文研 1998）では多少判別が可能となり、内区外周の櫛歯文帯は1/3周程明瞭に確認できる。また、文様に関しても龍か虎かの判別はできないが、4像分ほど確認できる。ただし、不鮮明であるため判別しがたいが、頭部分と下半身部分とに分かれているため2像分と思われるも1像である可能性があり、その場合は2像分とも考えられる。また、破片の接合に問題があることを考慮すれば、配置としては二像式または四像式のどちらの可能性も考えられる。同様に、同行式かあるいは旋回式かの判断も現状では不明である。神奈川県内では管見の及ぶ限り、現在大小含め鏡は40面出土している（歴博 1986、他）が、盤龍鏡に属す鏡はこの1面のみである。本鏡は面径も10.5cmと小形であり、文様等の鋳出の状態も良好ではないことから仿製鏡と考えられる。また、この鏡から古墳の年代を推定するのは難しく、他の遺物等を勘案した前号の年代観（5C後半）に準じたい。（林）

[掲載図書] 神奈川県県民部県史編纂室1979『神奈川県史』資料編20考古資料

[掲載図書概略] 赤星氏撮影の了源寺鏡（盤龍鏡）の写真は非掲載。鏡の解説は215頁に記載される。

[引用参考文献] 東京国立博物館1986『東京国立博物館図版目録 古墳遺物篇（関東Ⅲ）』

国立歴史民俗博物館1986「共同研究日本出土鏡データ集成」2『国立歴史民俗博物館研究報告』第56集

東京国立文化財研究所1998『東京国立文化財研究所所蔵X線フィルム目録Ⅰ—考古資料編—』

川崎市市民ミュージアム2006『古墳の出現とその展開』

年報番号 02053 白山古墳 川崎市幸区南加瀬

1. 赤星ノートの内容

[資料保管場所] 慶応大学文学部考古学資料室 (出土遺物)

川崎市市民ミュージアム (複製品)

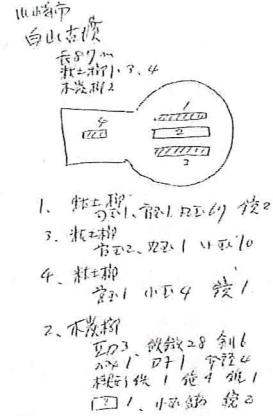
[記載内容概略] 封筒は社団法人日本損害保険協会のもので宛先には神奈川県立博物館御中と記される。料金別納郵便のため年月日等の記載はない。封筒の裏面には「川崎市白山古墳(日吉加瀬古墳)」、「南加瀬■■■■ 前方後円墳」、「(考雑27-7 森貞成)」、「川崎53」などのメモ書きがある。「南加瀬四九」とあるのは古墳の所在地である。「考雑27-7」には集報として白山古墳調査時の概要が簡潔に書かれている(森 1936)。

封筒に入っていた資料は、古墳の概略図及び出土遺物メモ1枚(①)、古墳等高線図コピー2枚(②)、台紙に貼られた鏡の写真2枚(③、④)、鏡の拓本1枚(⑤)の計6枚である。以下、順次、記述していく。

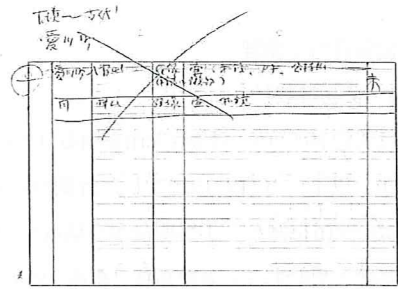
①用紙には「神奈川県史編纂室」と印刷された使用済みと思われる原稿用紙の裏面を使用し、古墳の概要と遺物等について以下のように記載している。「川崎市白山古墳」のタイトルの後、「長87m 粘土槨1、3、4 木炭槨2」と記述してある。その下に古墳の外形及び主体部の模式図が描かれ、埋葬施設には1～4の番号が付される。その下に各埋葬施設から出土した遺物が順次、列挙され、

- 「1、粘土槨 勾玉1、管玉1、丸玉67、鏡2
- 3、粘土槨 管玉2、丸玉1、小玉10
- 4、粘土槨 管玉1、小玉4、鏡1
- 2、木炭槨 直刀3、鉄鎌28、剣6、のみ1、刀子1、斧頭4、楔形鉄1、鉋4、錐1、?1、小玉多数、鏡2」と記載されている。

1の粘土槨は後円部北粘土槨のことで、鏡とあるのは乳文鏡1、珠文鏡1である。3の粘土槨は後円部南粘土槨を指し、4の粘土槨は前方部粘土槨で、鏡とあるのは櫛歯文鏡1である。2の木炭槨は後円部中央木炭槨で、斧頭とあるのは鉄斧、楔形鉄とあるのは楔形鉄製品、?は鎌と考えられる。鏡は三角縁神獸鏡1、内行花文鏡1である。裏面には前述したように神奈川県史編纂室の原稿用紙に調査時のメモが記載されている。「古墳～古代 愛川町」のタイトルの後「愛川町 八菅山 経塚(平安～鎌倉初) 壺、和鏡、刀子、念持仏、改行) 同 幣山 裏経塚 壺 和鏡」と遺構、遺物について記載されている。しかし「愛川町…念持仏」の1行には一本の線が引かれ、最後に「未」と書かれている。さらに、このメモ全体には大きく「X」印が付けられており、愛川町の資料作成途中または未整理のまま使用されなくなった、あるいは整理が終了し、不要になったと考えられる。このことから、少なくとも愛川町の資料調査後、白山古墳の資料調査が行なわれたことが推察される。

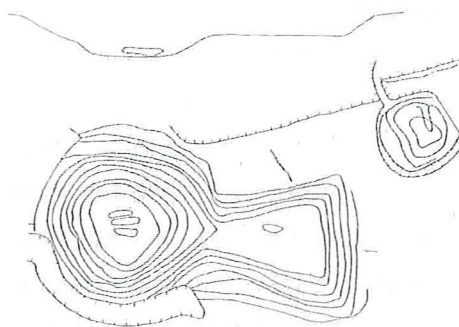


第5図 ①古墳概略図・遺物メモ表



第6図 ①古墳概略図・遺物メモ裏

②2枚の内、1枚は図のコピーに手書きで書き込みがされている。図の上方に「川崎市白山古墳」、「県史」と書かれているが、文字は図と天地が逆である。裏面にも「川崎白山」とある。もう1枚はメモ付のまま表面のみをコピーしたものである。図は上に2基の古墳の等高線図が描かれ、下に中線上のエレベーション図が描かれている。縮尺等は記されていないが、全長87mであるから約1/4の図となる。特に説明はないが東側が白山古墳、西側が第六天古墳とわかる。また同図は『神奈川県史』にも掲載されている。「県史」とあるメモ書きはその書かれた時期が作成の前後では解釈が異なってくる。作成前であれば『県史』に掲載する目的で書かれた、作成後であれば『県史』に使用した資料として書かれ同封されたと推察されるが、封筒に年月日等の手掛かりがない以上、詳細は不明である。ところで、白山古墳は1937年に慶應義塾大学により発掘調査がされた後、1953年に報告書が刊行されている(柴田・森1953)。報告書には「実測図」として同様の等高線図は掲載されているものの、『県史』掲載と同図は使用されていない。報告書には温泉旅館とみられる建築物、白山古墳と第六天古墳を通るエレベーション図等も掲載されているが本資料には見られない。この報告書の後に刊行された『県史』には引用文献として報告書名を掲載しているが、実際は報告書の実測図から必要な線を取捨選択し、『県史』用に図面を作成し直したと考えられよう。



第7図 ②白山古墳・第六天古墳等高線図



写真2 ③三角縁神獸鏡写真 (約1/6)

③三角縁神獸鏡の白黒写真が1枚台紙に貼られている。台紙の下には「川崎市白山古墳出土三角縁神獸鏡 重文 於慶大」と記されている。鏡裏は緑錆がほぼ全面に巡ってはいるものの、鮮明な状態である。

④三角縁神獸鏡のレプリカの白黒写真が1枚台紙に貼られている。写真は展示場所で撮影されたもので、台紙の下には「川崎市産文 模造鏡」、「日吉古墳出土鏡」、「文献 高津区馬絹古墳発掘調査概報 樋口清之・金子皓彦」等と記されている。「川崎市産文」とは「川崎市産業文化館」を指したものとされるが、その後「川崎市教育文化会館」へと名称が変わり、資料は「川崎市市民ミュージアム」開館時に移管されている。



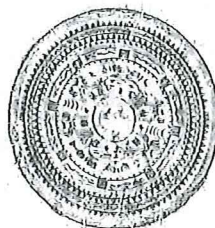
写真3 ④三角縁神獸鏡写真・模造鏡(約1/6)

「文献」に挙げられている資料には同じ川崎市内の馬絹古墳に関する報告が書かれているものの、白山古墳に関する内容は書かれていない。馬絹古墳は7C後半と時代も新しく鏡の出土もないため関連性は薄く、この台紙に記載した意図は不明である。ただ同時期に馬絹古墳の資料調査も行われていたと推察される。

⑤鈕の部分に十字の切り込みを入れ、薄紙に三角縁神獸鏡の拓本が取られ、その横に鏡の外形をなぞった円が薄鉛筆描きされている。右下には「白山古墳出土三角縁神獸鏡(模造鏡による)」と書かれている。

2. 掲載資料の整理

[遺構・遺物概要] 白山古墳は標高33mの台地上に構築された前方後円墳で、全長87m、後円部径42m、高さ10.5m、前方部幅37m、高さ7mを測る。主体部は後円部の主軸に沿って木炭塚1、粘土塚2、前方部の主軸に沿って粘土塚1の計4基設置されている。出土遺物は赤星ノートの項目で既に記述してある。白山古墳からは計5面の鏡が出



第8図 ⑤三角縁神獸鏡・模造鏡拓本

資料のみ3種類あることから、この鏡について少し検討してみたい。本鏡は三角縁天王日月獸文帯四神四獸鏡である。面径22.4cm、縁厚2.2cm(柴田・森 1956より数値を計測)を測り、表面の一部分に錆着が見られるが状態は良いと思われる。以下、写真から起こした計測値を記す。内区径は18.2cm、外区幅は2.1cm。鈕は有節重弧文圈を有し、鈕径は2.8cm、鈕座径4.8cmである。獸帯幅は0.95cm、獸文は右・外向きに回り、外向きに「天王日月」と書かれた1.0～1.1cm四方の方格を8個ほぼ等間隔に配すことで内区文様を区画している。乳は鈕の外周(内区)に素乳を4個配し、乳径は0.65～0.75cmを測る。また、内区外周には円座乳を4個配し、神像と獸像を区画する。乳座径は1.1～1.2cmを測る。構成は内区が鈕-有節重弧文-主文様帯-鋸齒文帯-獸帯(方格)-櫛齒文帯-鋸齒文帯となり、外区は鋸齒文帯-複波文帯-鋸齒文帯-三角縁である。主文様は2体並んだ神像の両側に2体の獸像が向い合う構図が対になる対置式で、小林氏の配置A(小林 1976)に属す。神獸像表現は配置AまたはF₁に多いとされている表現②硬直派に属す(京大 1989)。また、この鏡群の特徴を示す、鈕を挟んで笠松文様が一直線上になるように配される。

白山鏡は京都府椿井大塚山古墳出土鏡と同型鏡であることが以前から知られており、本鏡の他に同型鏡が5面ある。①京都府椿井大塚山古墳出土鏡M13、②同M14、③同M15、④山口県竹島古墳(御家老屋敷)出土鏡、⑤福岡県神蔵^{かんくら}古墳出土鏡である。椿井大塚山古墳鏡3面は三次元デジタル計測および写真(樫考研 2005)により、白山鏡は写真により観察をしたところ、範傷の進行や文様の崩れが一部に見られる。鏡の製作方法には諸説あり決着をみない。岸本氏は範傷の進行と増加、文様の鮮明度の関係を検討し、いわゆる「同範鏡」ではなく蠟原型による同型鏡の製作を提示しており(岸本 1996)、本鏡群の製作方法を検討する上で重要な視点と考える。白山古墳の年代については三角縁神獸鏡と同じ木炭塚から出土した仿製内行花文鏡との組み合わせ等から検討する論考があり(浜田 1996)、「木炭塚は粘土塚に先行し(中略)都出氏の編年案に従い3期(前半)」としている。三角縁神獸鏡は伝世鏡とも考えられ、鏡の年代が古墳の年代を示すものではない可能性もあるが、古墳の形状を考慮に入れて、4C後半頃が妥当と考える。(林)

[掲載図書] 神奈川県民部県史編纂室1979『神奈川県史』資料編20考古資料

[掲載図書概略] 三角縁神獸鏡の写真は図版741、古墳等高線図は図版742、遺跡の解説は216頁に掲載。

[引用参考文献] 森貞成1936「川崎市加瀬に於ける二基の古墳発掘」『考古学雑誌』第二十七巻 第七号

柴田常恵・森貞成1953「日吉加瀬古墳」『考古学民族叢刊』二 三田史学会

小林行雄1976『古墳文化論考』平凡社

京都大学文学部考古学教室1989『椿井大塚山古墳と三角縁神獸鏡』思文閣出版会

岸本直文1996「雪野山古墳副葬鏡群の諸問題」『雪野山古墳の研究』雪野山古墳発掘調査団

浜田晋介1996「加瀬台古墳群の研究I」『川崎市市民ミュージアム考古学叢書』2

奈良県立橿原考古学研究所2005『三次元デジタル・アーカイブを活用した古鏡の総合的研究』

年報番号 02054 川崎市上丸子古墳 川崎市中原区上丸子

1. 赤星ノートの内容

[資料保管場所]

不明

[記載内容概略]

スケッチの入っていた封筒は、横須賀市博物館の封筒で、表面に「川崎市資料 蟹ヶ谷古墳 矢上古墳 上丸子古墳」、裏面には「川崎市上丸子古墳 人文ハニワ2体」と記載されており、年月等の情報は無い。スケッチは表紙1枚、古墳の位置を示すメモ1枚(第7図)、平面位置を示す略地図1枚(第2図)がある。表紙には、「川崎市上丸子古墳 新幹線資料」とある。資料1によると、大正10年頃上丸子古墳の墳丘上には伊勢宮があり、「盛土厚5m位、径10m位」あった事が記載されている。古墳の位置は、「丸子波場のわき、中原道(大山路)の北側」とあり、資料2に略図が記載されている。古墳は大正11年頃に破壊されており、その時に人物埴輪2体が出土し、「出土品は学校へもっていった」とある。出土した埴輪の詳細については、「石野氏書によると男女各1体とあり 他の埴輪とある」とある。

川崎市上丸子
 上丸子古墳
 盛土厚5m位 径10m位 あり
 (大正10年頃) 破壊され 伊勢宮
 あり、丸子波場のわき、中原道
 (大山路)の北側
 石野氏書によると 男女各1体とあり
 (大正11年頃) 出土品は学校へも
 った
 (石野氏書によると 男女各1体とあり
 他の埴輪とある)
 川崎市博物館 資料1の次の
 図

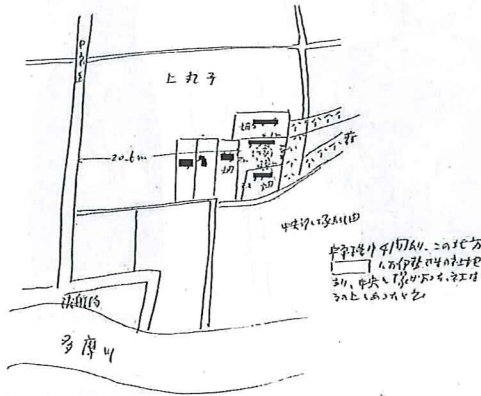
第9図 上丸子古墳のメモ

2. 記載資料の整理

[遺構・遺物概要]

上丸子古墳は、上丸子・宮内古墳群に属し、中原区上丸子に所在した古墳である。本古墳は、大正10年に行われた多摩川の河川工事(堤防築造)によって消滅している。

この河川工事中に出土した埴輪について、山田蔵太郎氏は現地を視察して、人物埴輪2個体の写真撮影を行っている(山田1927)。山田氏は、出土した人物埴輪には残りの良い男女1対の埴輪と、それ以外にも人物埴輪があった点に触れ、



第10図 上丸子古墳の略図

それらの初見を述べている。男子埴輪は右胸の上部に弓形に隆起した表現が施されており、女子埴輪には左肩から腰部へ板状粘土を貼付しており、東京国立博物館や東京大学人類学教室には同様な埴輪は見あたらないと述べている。山田氏は、男子埴輪の弓形に隆起した表現は弓、女子埴輪の板状の貼付は盾を表現したものと理解している。その他の埴輪については、服装や容貌が上品で、身分の高い地位の埴輪との初見を述べており、盛装した人物埴輪の可能性が高い。次に、山田氏の撮影した写真を観察すると、胴部に3条の突帯が確認できる。胴部側面にはヒレ状の粘土板が認められ、その形状から盾持人埴輪と見られる。突帯が胴部の全体に巡っていることから、胴部前面に盾状部分を貼付するタイプではなく、側面にヒレ状に貼付するタ

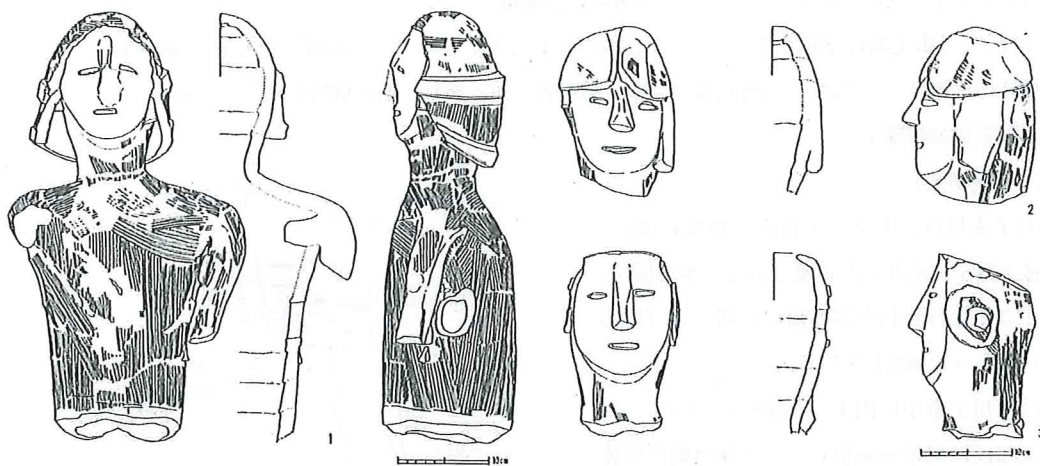
イブと見られる。山田氏がこの埴輪について、男女1対の埴輪とした根拠は不明であるが、写真で見ると2体の埴輪とも盾持人埴輪と考えられる。底部付近の画像は不鮮明ではあるが、かなり粗い調整が施されているように見られる。

山田氏の撮影した写真以外の上丸子古墳出土の埴輪（第9図）が、川崎市市民ミュージアムに寄託されており、報告がされている（浜田 1991）。これらの人物埴輪は、頭部に粘土帯で冑を造形した武人埴輪（第3-1）、振り分け髪で垂髪表現を造形した盛装男子埴輪（第9図2）、頭部の島田髷が欠損している（頭部成形がドーム開放型）女子埴輪（第9図3）の3体である。これらの埴輪の胎土を見ると、長石（径5mm前後）を多く含み、石英（径3mm前後）や礫（径5～10mm）・砂粒などを多量に含んでいる。白井坂埴輪窯跡や久本山古墳出土の埴輪と比較して、胎土が精製されておらず、砂粒などの混和材が多く含まれている点が特徴と言える。造形については、3個体とも目の位置や口・鼻などの造形が異なることから、異なる工人の作品と見られる。

最後に本古墳の時期について埴輪から考えてみたい。これらの埴輪が窖窯焼成である点や抜刀形武人埴輪の出現時期（若松1992）、周辺古墳の埴輪の終焉を考慮すると、6世紀中頃～6世紀後半に位置づけられる。

現在この埴輪の保管場所については不明である。赤星ノートの記述から出土品は近くの学校へ持っていったことが確認できるが、学校名は記載されておらず、どこの学校かを特定するに至っていない。今後の追跡調査に期待したい。

（新山）



第11図 上丸子古墳の埴輪

遺構・遺物概要の引用文献

- 1967・68 伊藤秀吉「川崎市の古墳(1)・(2)」『川崎市文化財調査集録』3・4 川崎市教育委員会
- 1988 川崎市『川崎市史』資料編1
- 1989 佐藤善一・伊藤秀吉「川崎市内の高塚古墳について」『川崎市文化財調査集録』24 川崎市教育委員会
- 1991 浜田晋介「川崎の埴輪Ⅰ」『川崎市市民ミュージアム紀要』第4集 川崎市市民ミュージアム
- 1996 浜田晋介「川崎の埴輪Ⅱ」『川崎市市民ミュージアム紀要』第9集 川崎市市民ミュージアム
- 1996 浜田晋介「加瀬台古墳群の研究Ⅰ」『川崎市市民ミュージアム考古学叢書』2 川崎市市民ミュージアム
- 1997 浜田晋介「加瀬台古墳群の研究Ⅱ」『川崎市市民ミュージアム考古学叢書』3 川崎市市民ミュージアム
- 2006 新山保和「人物埴輪の髷の造形表現について」『群馬県の人物埴輪』群馬県古墳時代研究会資料集第8集
- 1927 山田蔵太郎『川崎誌考』石井文庫
- 1992 若松良一「人物・動物埴輪」『古墳時代の研究9』雄山閣

年報番号 02072 川崎市高津区久地西前田耕地横穴群 川崎市高津区久地

1. 赤星ノートの内容

[調査(踏査)年月]

資料には昭和55年3月31日、昭和55年4月4日の2つの日付が見られる。

[記載内容概略]

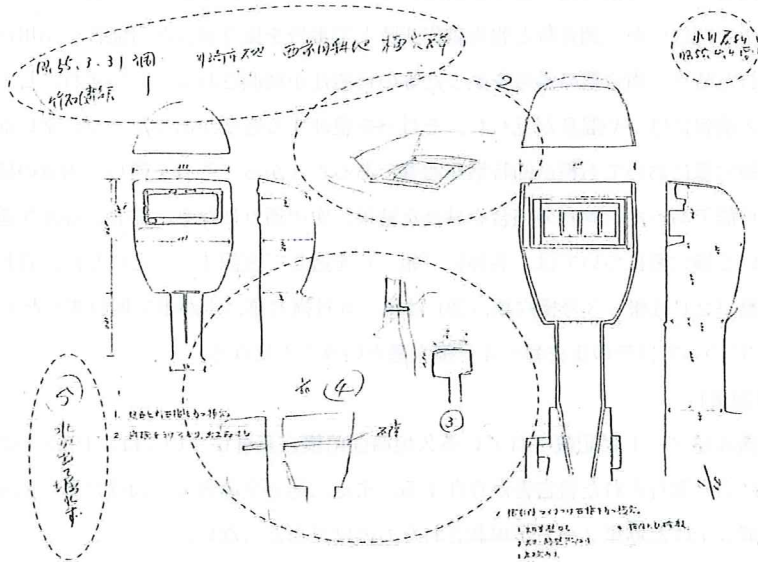
資料が収められた封筒の裏面には、横須賀市内の事務用品店である「和光堂」というスタンプが押されている。資料は3種類あり、資料Aは昭和46年7月30日に発行された国土地理院発行2万5千分の1地形図「溝口」、資料Bは川崎市久地西前田耕地横穴群横穴墓の平面略図(第5図)、資料Cは「川崎市久地西前田耕地現況平面図S=1:1000」と書かれた図面である。

資料Aの地形図中には鉛筆等でマーキングされた箇所が複数あるが、そのうちの1箇所から欄外に線がのびされ、「横穴」、「55.3.31調査 竹石健二」という走り書きが見られる。資料Bの横穴墓略図右上には赤星氏の走り書きで「小川君より 昭55.4.4受」とあり、左上に「昭55.3.31調 竹石健二君」とあり、略図自体は「小川君」から受け取ったと思われる。なお、「竹石健二君」とは同横穴墓群の発掘調査団長であった日本大学教授の竹石建治氏で、「小川君」は小川裕久氏のことであろう。略図には2基の横穴墓の平・断面図がほぼS=1/60のスケールで描かれ、その下には各横穴墓の特徴が簡条書きにされている。資料B中の破線で囲んでいる部分が赤星氏による書き込みの主たるもので、2基以外の横穴墓の略図や特徴等に関する情報が追記されている。資料Cの紙面右端付近には他よりやや太い線で囲まれた「申請地」となっている範囲があり、その内部には既に開口している横穴墓を含め6基の横穴墓の位置がプロットされている。それらに隣接した位置にも横穴墓が1基存在するようで、それが開口している状況が記されている。また、6基中5基の横穴墓にはその番号と思われる数字と共に、「小さいソデアリ」や「つくりつけ石棺」、「石障」、「組み合わせ①」と言った各横穴墓の特徴が簡略に記されている。

2. 記載資料の整理

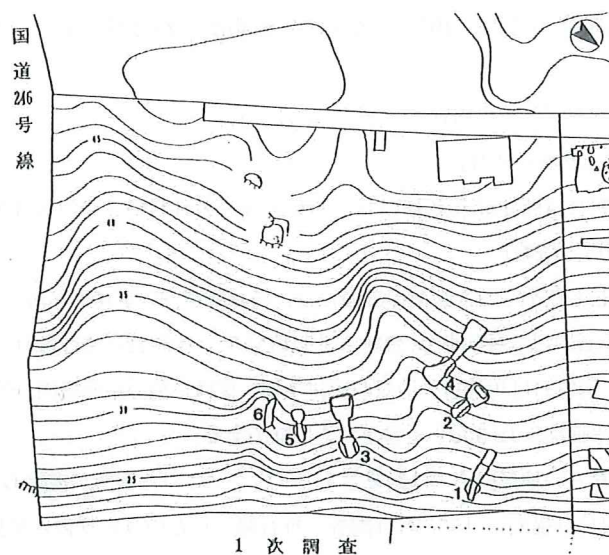
[遺跡概要]

この赤星ノートにある川崎市久地西前田耕地横穴群に関しては、先述したように竹石建治氏を団長とする久地西前田横穴墓群発掘調査団により発掘調査が行なわれた。調査は当該地の低層住宅建設に伴うもので、調査期間は昭和55年2月から3月にかけてである。発掘調査の結果、横穴墓6基と弥



第12図 資料B(原本の凡そ1/3)

生時代竪穴住居址等が確認された。横穴墓は谷を挟んで西側（1・2・4号横穴墓）と東側（3・5・6号横穴墓）の2群に分かれ、それぞれ3基ずつ構築されていた（第13図）。どの横穴墓においても特徴的な様相を呈しており、以下、その概略を述べる。1号横穴墓は戦時中に防空壕として二次利用されており、調査前に既に開口していた。そのため、出土遺物も皆無だった。2号横穴墓には、溝をめぐるせそこに切石をはめ込んだ「石櫛」状あるいは「箱形石棺」の一部と思われる施設が玄室内で確認された。また、左側壁面



第13図 久地西前田横穴墓群位置図 (S=1/1200)

には舟と考えられる線刻画が描かれていた。3号横穴墓は、玄室奥壁に沿って設置された造付刳抜式石棺を有していた。4号横穴墓は墓前に階段状の墓道が確認され、玄室内には奥壁に沿って石障が設置されていた。5号横穴墓は他の1～4号横穴墓と比較すると目立った構造的特徴は見られないが、墓前域から鬼高Ⅱ式の土師器坏が出土した。6号横穴墓は横穴墓掘削中に地下水脈に当たってしまい、掘削途中で放棄されたようである。従って、横穴墓としては機能しなかったとされる。

[赤星ノートと報告書との整合性]

赤星ノートの資料Bに書かれている各横穴墓の番号と報告書に掲載された横穴墓のそれとを対比したところ、両者における横穴墓の番号が対応していないものがある点に気が付いた。このような状況になった要因は定かではないが、調査時と報告書作成時とで番号を振り替えた可能性や小川氏から赤星氏へこの情報が伝えられた時点で横穴墓の番号を誤った等の可能性が推測されよう。いずれにしても、横穴墓の番号に関する部分の情報にはやや混乱が見られ、それらを整理する必要があるだろう。幸いなことに久地西前田横穴墓群は各横穴墓においても構造的特徴が顕著であることから、それを通して両者の横穴墓の番号を対応させることが可能であった。両者の整合を試みた結果、次の通りになる。なお、混乱を避けるために報告書に掲載されている横穴墓については、名称に「報-」を冠して表記することにした。資料Bにある「1」は報-2号横穴墓、「2」は報-3号横穴墓、「③」は報-5号横穴墓、「水が出て掘れず」とある「⑤」は報-6号横穴墓、「④」についてはそのまま報-4号横穴墓ということになる。

[掲載図書]

当該赤星ノートに記載されている久地西前田横穴墓群については、1998年に久地西前田横穴墓群発掘調査団により発行された報告書が存在する。また、他の文献等でも同横穴墓に関する記述は散見されるが、ここで取り上げた赤星ノートが掲載されたものは見当たらない。 (小西)

遺跡概要・掲載図の引用文献

1998 久地西前田横穴墓群発掘調査団「久地西前田横穴墓群-第1次調査-」

※第13図は上記文献に掲載されたものを一部加筆したものである。

年報番号 02078 川崎市末長 川崎市高津区末長付近

1. 赤星ノートの内容

[資料保管場所]

■■■■氏蔵とされる。

[記載内容概略]

図が入っていた封筒は、地質調査所のもので神奈川県教育庁博物館図書室御中Cと記される。料金別納郵便のため年月等の情報は無い。封筒裏面には「川崎市高津区末長 ■■■■氏蔵 土師壺 蔵骨器？」とメモ書きがされる。図は無地B4大用紙の中央に甕のスケッチが描かれ、周囲に「〔土師器〕 橙褐色 口縁部(1/3欠損) = 胴部 口径13.0 高さ20.0 底径6.5 川崎市末長出土 黒土層中表面より30cm～45cmより出土 川崎市■■■■氏蔵」と書かれている。

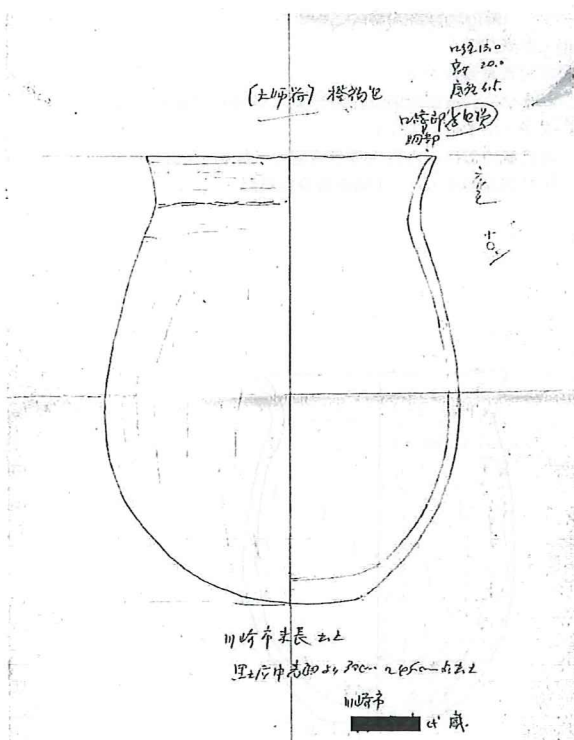
2. 記載資料の整理

[遺構・遺物概要]

当該遺物の■■■■氏(川崎考古学研究所:神奈川県川崎市宮前区■■■■)所蔵を確認した。氏のご厚意により平成20年11月20日～12月10日の間、遺物貸出の許可をいただき、かながわ考古学財団本部において実測と写真撮影を行った。以下はその際の観察記録である。

器形は小型の甕型で口縁部は浅い「く」の字状に外反しヨコナデされる。胴中央部に最大径を測り、底部まで緩やかな膨らみを呈す。肩から胴部には縦方向のヘラ整形が丁寧に施され、胴部下端から底部にかけては斜め横方向にヘラ整形される。底部は円形にヘラ削りされるが、やや丸味を帯びており安定性を欠く。内面はヘラナデされる。色調はやや白味がかった明橙色で、底面から胴部下半の一部に焼成時の焼きムラと思われる黒斑が見られる。胎土は砂粒が混じり粗いが、焼成は良好で堅く締めりズッシリと重たい質感である。法量は口径14.0(13.8～14.3)cm、底径6.0cm、器高19.5cmを測り、ノート記載の計測値とは最大で8mm程の相違がみられた。口縁部の厚みは7mm、底部は11mmである。土器には「高津区末長 ■■■■贈 出土年 S44.5.10」と注記されている。他に土器内部に「出土地 川崎市末長 出土年月日44年5月10日 発見者■■■■ 地表下約30cm～40cm 黒土層中表面より30cm～45cm 黒土層中」と手書きされた紙片が入っていた。

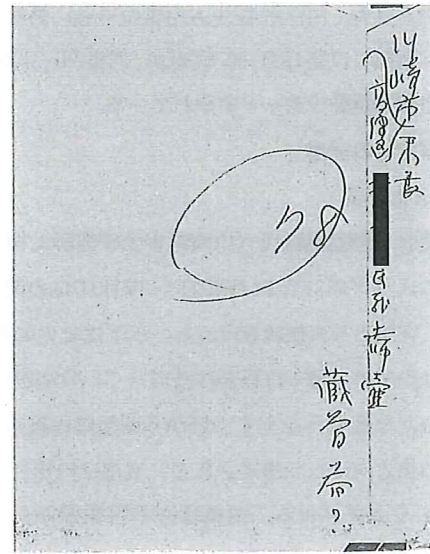
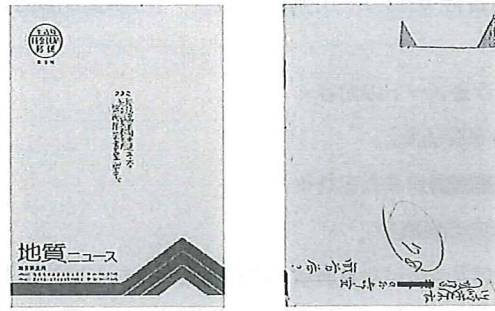
持田氏によれば、この土器は「末長■■番」(註1)、「新作小高台遺跡」の範囲内より出土したものである。この遺跡は県遺跡台帳では川崎市No.72に該当し、昭和54年8月20日から56年5月15日に



第14図 赤星ノート [1/3]

新作小学校建設に伴う、川崎市による事前調査が行われた(川崎市教育委員会 1982)。この調査の前後にこの土器が■■氏によって採集され、■■氏に寄贈されたものである。赤星氏の来訪についての■■氏の記憶は定かではなく、ノート作成の経緯は不明である。

当甕の時期は、胴中央部に最大径を測り、胴部下半部が膨らむ形状や、頸部から底部にかけての縦方向のヘラ削り調整等の特徴から7世紀台、古墳後期と思われるが、奈良初頭にかかる可能性もある。赤星氏は封筒裏面に、「蔵骨器？」と書き残しているが、現況では本個体が骨蔵器として使用された痕等については確認出来ない。周辺域を概観すると、約3km南東にあたる有馬川流域は古代火葬骨蔵器の濃密な分布域であり(村田・増子 1979)、赤星氏はこうした周辺の状況を鑑みて、メモ書きを残したものと推定される。(吉田)



第15図 封筒・封筒裏面 下：裏面拡大

(註1) 『川崎の遺跡 - 埋蔵文化財分布踏査地図 -』 1976
川崎市教育委員会 による

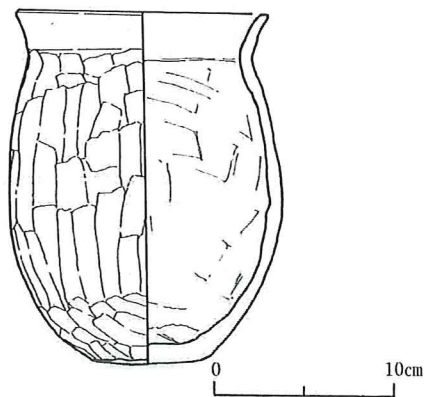
引用・参考文献

川崎市教育委員会 1982

『新作小高台遺跡発掘調査報告書』 川崎市教育委員会

村田文夫・増子章二 1979

『南武蔵における古代火葬骨蔵器の様相』 『川崎市文化財調査集録 15』 川崎市教育委員会



第16図 再実測図 [1/4]



写真4 甕

年報番号 02080 川崎市高津区向ヶ丘 川崎市高津区向ヶ丘?

1. 赤星ノートの内容

[資料保管場所]

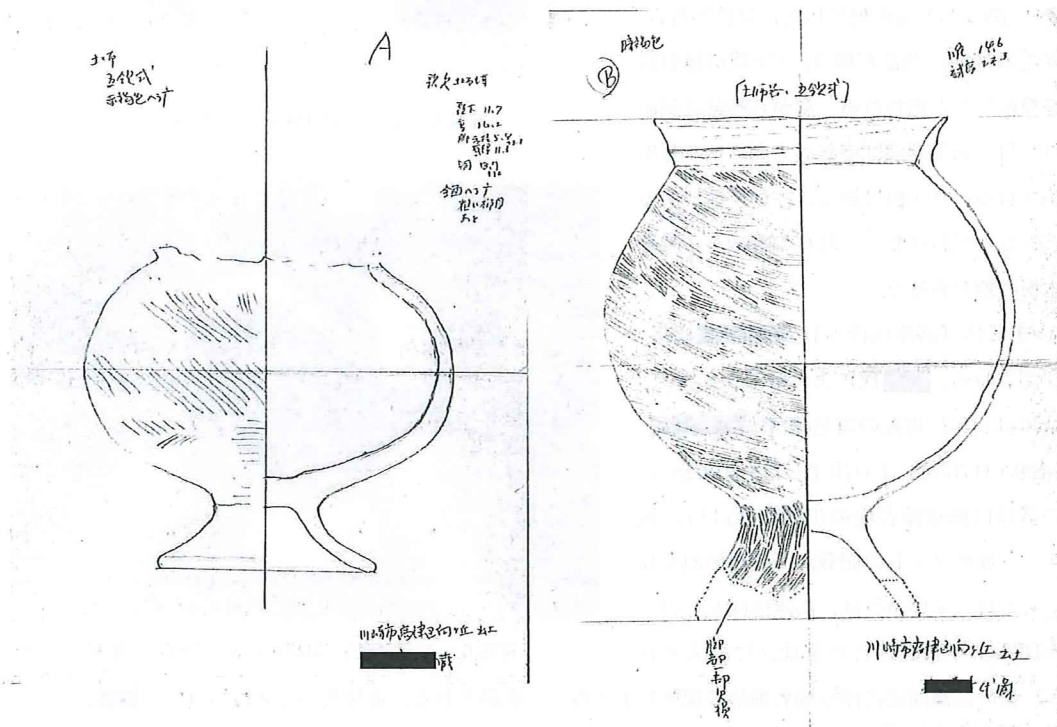
■■■■氏蔵とされる。

[記載内容概略]

図が入っていた封筒は「UNITED STATES GOVERNMENT PRINTING OFFICE(米国政府印刷局公文書課)」と印刷され、宛先は「KANAGAWA PREFECTURAL MUSEUM (神奈川県立博物館)」とタイプされている。消印等時期を示す情報はない。B4版ほどの大きさの無地の用紙が2枚(AおよびB)入っており、ともに鉛筆で描かれ、マコを使用した痕跡が見られる。

A: 中央に「罎」が描かれ、余白に「A 土師 五領式 赤褐色ヘラ广」「頸欠土師罎 頸下11.7 高16.2 脚元径5.4 +3.3 底径11.3 胴18.7 +10 全面ヘラ广 粗い櫛目あと」「川崎市高津区向ヶ丘出土 ■■■■蔵」とメモ書きされている。

B: 中央に台付甕が描かれ、余白に「B 暗褐色」「(土師器・五領式)」「口径14.6 残高22.3」「脚部一部欠損」「川崎市高津区向ヶ丘出土 ■■■■氏蔵」とメモ書きされている。



第17図 赤星ノート [1/3] 左:A(脚付罎) 右:B(台付甕)

2. 記載資料の整理

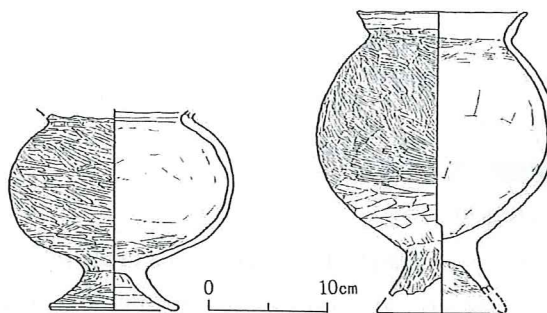
[遺構・遺物概要]

当該遺物の■■■■氏(川崎考古学研究所: 神奈川県川崎市宮前区■■■■)所蔵を確認した。氏のご厚意により平成20年11月20日～12月10日の間、遺物貸出の許可をいただき、かながわ考古学財団本部において実測と写真撮影を行った。以下はその際の観察記録である。

A: 口縁部をすべて欠損した脚付の埴、もしくは小型の壺である。胴部はハケで整形されたあと横方向のヘラみがきが施されている。色調は赤味が強いが彩色されたものではなく胎土の色と焼成によるものである。形状等から弥生終末期から古墳前期の所産と思われる。

B: 脚台部下端を欠損した台付甕である。口縁部は外面に凸部が廻り、S字状口縁台付甕を模倣したと思われる。肩から胴部は斜めのハケ目、胴下端部は横斜め方向のヘラ整形が施される。ハケ目は粗く、在地土器であることをうかがわせる。これらの特徴から時期は古墳前期であろう。

A・B共に「高津区向ヶ丘■■■■採集」と注記される。■■■■氏によればこの2点の土器は昭和44年に現在の宮前区宮崎■■■■、「土橋No.3」(註1)より出土したものである。この遺跡は県遺跡台帳の川崎市No.117に該当する。赤星ノートの記載が「高津区向ヶ丘出土」となっているのは、高津区向ヶ丘の一部が昭和57年新設された宮前区に編入される等、後の区画編成に伴う地名地番の変更によるものと推測される。赤星氏の来訪についての■■■■氏の記憶は定かではなくこの資料作成の経緯は不明である。



第18図 遺物再実測図[1/6] 左:A(脚付埴) 右:B(台付甕)

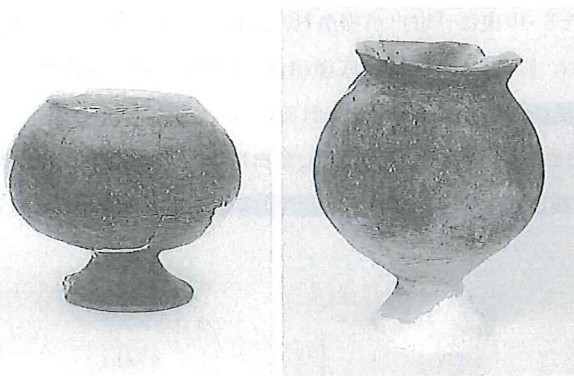


写真5 左:A(脚付埴) 右:B(台付甕)



写真6 B(台付甕) 川崎考古学研究所にて撮影

(吉田)

(註1)『川崎の遺跡 - 埋蔵文化財分布踏査地図 -』1976 川崎市教育委員会 に記載

研究紀要14

かながわの考古学

発行日 2009(平成21)年3月16日

発行 財団法人かながわ考古学財団

〒232-0033 横浜市南区中村町3-191-1

tel (045)-252-8689 fax (045)-262-8162

<http://Kaf@kaf.or.jp>

印刷 野崎印刷紙器株式会社

KANAGAWA NO KOUKOGAKU

Vol.14

(Bulletin of KANAGAWA Archaeology Foundation)

CONTENTS

Project Team for Paleolithic Studies: Paleolithic Artifacts in Kanagawa Prefecture Distribution (2) Layer L1S~L1H (2)	1
Project Team for Jōmon Period Studies: Change of the Jōmon Culture in Kanagawa Prefecture (VII): An Example in the earliest Late Period. An Aspect of the Shomyoji-Type Pottery Period, Part 4: Cultural Aspect (2)	17
Project Team for Yayoi Period Studies: The Corpus of Yayoi Era Metal tool in Kanagawa Prefecture	31
Project Team for Kofun Period Studies: Track of Dr. Naotada Akaboshi, A Pioneer of Archaeological Research in Kanagawa Prefecture (6): A Report of Materials of the Kofun Period in the So-called "Akaboshi Note".	43
Project Team for Nara-Heian Period Studies: Aspect of Tile of Village Ruins excavated in Kanagawa Prefecture (2)	59
Project Team for Medieval Age Studies: Castle Site in the Medieval Age in Kanagawa Prefecture	81
Project Team for Early Modern Age Studies: The Corpus of Common Houses in the Early Modern Age (6)	97

March, 2009

KANAGAWA Archaeology Foundation

Yokohama, Japan